

本城氏の編集部をキー・ステーションにして、それぞれが電話連絡やファックスによる作業を続けた。ときには、必要に迫られ何度か大学の図書館や研究室に出かけることもあった。もちろん、それと並行して編集部から直接執筆者への照会も行われた。索引は、本文内容をふまえた上での精緻さと表記そのものの正確さがなければならない。こういった考えのもとで、作製されたのが「索引」である。最後のつめの作業が終ったのは、『オスカー・ワイルド事典』出版の予定日である10月3日より約1カ月半ほど前の8月20日午後8時すぎ、場所は新宿東口駅前の談話室の一角であった。

世界最初のワイルド事典

荒井良雄

(駒沢大学教授・第5代会長)

『ワイルド事典』を出版するのは、協会創立当初からの夢でした。『ワイルド全集』は、本間久雄先生を中心にして、1920年に天佑社から出版されましたし、協会を創立した1975年には西村孝次先生の責任編集による全集が進行していました。そこで、世界最初のワイルド協会による世界最初の事典を作る企画が、第二代会長の小倉多加志先生によって始められ、作品中心のハンドブックの形で、ほぼ原稿が集まっていたのですが、全詩を担当していた由良君美氏に続いて小倉先生も亡くなったので、この企画はそのままになっていました。

そこへ、私が会長であった時に、山田勝先生から、ワイルド事典の話が持ち込まれました。英語英米文学関係の事典を相次いで出版して注目をあびている北星堂が引き受けてくれるということだったので、ワイルド没後百年を前に、またとない機会が訪れたと判断して役員会に計り、協会を挙げて協力することにしました。

作品中心の事典原稿がすでに完成しているという事情と、山田先生の意向もあって、十九世紀末の社会や文化や生活を網羅した「世紀末大百科」の方向で項目選定をするという編集方針が決まり、三年間にわたって夏休みの一週間を編集会議に当てました。この分野を専門とする協会員以外の研究者を含めて八十名近くが執筆者として参加し、マーリン・ホランドやサー・ジョン・ギールグッドなどの国際的協力を得て、1997年10月に出版できました。カール・ベクソン編の『ワイルド百科事典』が出版されるという情報が伝わっていましたので、それ以前に是非とも完成したいと思い、私の研究室に事務局を移して編集作業に全力を傾注しました。

世界最初のワイルド事典出版という快挙を成し遂げて、爽快な気分です。執筆者の皆様と北星堂に感謝します。

「座談会」発言要旨

佐藤 喬

(慶應義塾大学名誉教授)

明日はたまたまオスカー・ワイルドの命日に当るが、その前夜祭(?)ともいうべき本日、この日本でこのような催しが行われていることに、ふしぎな因縁のようなものを感じている。

編集委員会では山田会長より、「ふだんはさぼりがちの佐藤も、今度はよくやった」とおほめの言葉を頂き、恐縮した。

私の発議で、サマセット・モームやアイリッシュ・アイデンティティなどいくつかの事項を項目として取り上げて下さったことを、うれしく思っている。

「まじめが肝心」の中のキューリのサンドイッチの件など、これまでは学生から質問が出ると自分で調べなくてはならなかったが、この事典にはそんなことまで載っているので、手間が省けて助かっている。まことに便利な本が出来たもので、これからの研究者はこの事典のおかげでどれだけ助かるかわからない。

この本のサブタイトルは「イギリス世紀末百科」となっているが、グローバルな観点からのゆき届いた編集がなされているので、この「イギリス」はむしろ無くてもよかったのではなかろうか。

最近のアメリカの世紀末研究者の間には、「病氣」をキーポイントにする傾向が見られる。ワイルドが梅毒だったとの視点から、彼の人と作品のすべてを説明しようとした本も出ている位なので、「病氣」という項目を入れてもよかったかと思う。

ダヌンツィオについては、この事典でも方々にコメントされているが、世紀末ヨーロッパのデカダン文学運動に占める彼の存在の重要性を考えると、「ダヌンツィオ」という項目も入れてほしかった。

このように、まだ多少不備の感が残るものの、とにかくこのような立派な事典が完成されたことを、世のすべてのワイルド研究者と共に、心から喜び合いたいと思っている。